

地図帳の怪(5)

——中国地名カタカナ現地音化に関する資料・補遺——

明木茂夫

(承前)

一、はじめに

前稿「地図帳の怪」(1)〜(4)¹⁾に於いて私は、学校教材の社会科地図帳を中心に、中国地名のカタカナ現地音表記の功罪とその歴史の経緯について論じた。本来、地図帳に「ワンリー長城」「ター運河」と書いてあるのに気づいて爆笑し、その表記の方針や来歴について調べて見ようと思っただけで、本格的な批判を展開するつもりは無かったのだが、その後、エッセーや講演の形でもこの問題を論ずる機会に恵まれ、多くの方にご賛同いただいたと勝手に感じている。もちろん一方で、現地の人を読む通りにカタカナで記すのが礼儀だ、正しいんだ、というご意見もあるのは事実で、そのことも私は尊重しているつもりである。そのことと、拙論のカタカナ表記批判は別の問題であり、両立し得ることであることは既に述べた。ただ、カタカナで書きさえすれば不正確でもかまわないとか、カタカナ書きすることによって生ずる矛盾にはほとんどお構いなしとか、そうした事例も目にするこ

とが多くなったのも事実である。特に最近、中高の社会科教材には、首をかしげたくなるような問題が無いではない。

また二〇一一年十二月二十六日付読売新聞が「中国著名人の名 現地音に近く」と題する囲み記事を掲載し、中国人名地名に「中国標準語のアルファベット発音表記(ピンイン)のつづりをもとに、中国現地での発音を加味したフリガナ表記」を用いることを宣言したことも記憶に新しい。これはピンインの「つづり」に合わせる、中国語の発音は加味するだけであくまで副次的なもの、と言ってしまっているわけで、昔の国語審議会や文部省と同じ考え方である。

そこで本稿では、こうした社会情勢も考慮しつつ、今までの拙論の補足として、最近入手した資料をめぐって考察したことを書き連ねてみたい。一つは昭和三十年代の地図帳関連の文献について、もう一つは戦前の支那語音のカタカナ表記関連の文献についてである。

また授業やその他の場に於いて、本学の学生諸君にも、言葉というもの面白さや難しさについて考えてもらう材料として、カタカナ表記をしばしば話題に採り上げているのだが、ありがたいことに、彼ら

も気づいたことがあると直ちに私に教えてくれるようになった。そうした中で、高校受験・大学受験をめぐる問題も、少しずつ浮かび上がってきた。ここではそうしたことに關してもひと言触れて、この問題を考えて行く上の補足としてみたい。

二、出版社発行の冊子について

さて拙論『地図帳の怪(3)』——地名表記の手引き書をめぐって——に於いて私は、国語審議会・文部省、そして教科書研究センターによる中国地名カタカナ現地音化に関する資料を採り上げた。それに併せて、文部省の『地名の呼び方と書き方』《社会科手引き書》⁽³⁾(以下『手引き書』と言う)に呼応して教科書関連の出版社が作製した小冊子の類にも言及した。各出版社が学校関係者に配布し、新たな地名表記の基準を解説し、これを周知させ、さらに、自社の教材の採用を促すために作成した冊子である。そこで挙げたのは以下の三つであった。⁽⁴⁾

『文部省発表(昭和33年12月)』

地名の呼び方と書き方 抜粋』

全国教育図書 非売品 52頁

『社会科手引き書 地名の呼び方と書き方 1958年12月 文

部省』

付 中国標準音の書き方 中国地名・人名の書き方便覧 解説

日本書院 昭和三十四年二月十五日 60頁

『地名の正しい呼び方と書き方』

第一法規出版 昭和三十四年四月 46頁

この内、その時点で未見であったのが、第一法規のものであった。所蔵している図書館も近隣に無く、後日所蔵機関で調査する予定だったのだが、最近になって幸いにも古書店でこれ入手することができた。また右に挙げた三つの冊子以外にも当時同様の形で作成された冊子があるかも知れないと探していたところ、もう一つ中教出版の冊子を古書店で入手した。そこで本稿では、これらの冊子を通覧し、それについて若干の私見を述べ、以て中国地名のカタカナ現地音化の歴史を考えてみたいと思う。

まず第一法規のものから。

『地名の正しい呼び方と書き方』

第一法規出版 昭和三十四年四月一日発行 46頁 定価50円

というのがそれである。基本的には、文部省による前掲『手引き書』を受けて、それを転載し、解説を加えたものなので、他の資料とそれほど違ったものではなからうと予想はしていたが、実際に見てみると幾つか興味深い点を見出した。

私が入手した冊子には、まさにこれが教育関係者に配布された際に一緒に挟んであった案内の紙がそのまま残っていた(図1)。これがまた古本の楽しみの一つである。「ご案内」と題されたその紙には、教育法令集御購読者各位

とあり、これで配布対象は明らかである。また文中には、

さて、ご承知のとおり昨年末文部省で社会科の手引として「地名の正しい呼び方と書き方」⁽⁵⁾を発表いたしました。

つきましては、弊社ではこれを冊子としたし日頃のご愛顧に報いる一端としまして贈呈申し上げましたからご使用いただければ幸と存じます。(傍点・太字原文ママ)

とある。興味深いのはその後に、

なお、ご希望のむきは価額が少額のため一括十冊以上のお申し込みに限り一冊定価五〇円でご送付申し上げます。(一冊)と「冊」は原文ママ)

とあることである。一冊五〇円だが、十冊まとめてでないと販売出来ない、というわけなのだが、ここで気になるのが、その文部省の『手びき書』の定価である。実は文部省のものも定価は五〇円なのだ。同じ五〇円出すなら、百五十七頁もあり、表紙も厚くてしつかりしており、しかも文部省から直接出ている『手びき書』の方が、こんなべら

ご 案 内

毎度、格別のお引立を賜わりありがたく厚くお礼申しあげます。かねてより、弊社発行「教育法令集」につきましては、常に深いご理解と厚いご芳情をいただき心からお礼申しあげます。

さて、ご承知のとおり昨年末文部省で社会科の手引として、「地名の正しい呼び方と書き方」を発表いたしました。

つきましては、弊社ではこれを冊子としたし日頃のご愛顧に報いる一端としまして贈呈申しあげましたからご使用いただければ幸と存じます。

なお、ご希望のむきは価額が少額のため一括十冊以上のお申し込みに限り一冊定価五〇円でご送付申しあげます。

昭和三十四年四月

第一法規出版株式会社

教育法令集

御購読者各位

図1

べらの冊子よりもよさそうなものだが、実はこちらの冊子にはそれだけの付加価値があるのである。であるからこそ、追加販売のサービスをすると言っているわけだ。そしてその付加価値の部分、即ち文部省の『手びき書』を補う部分こそ、我々が中国地名のカタカナ化の過程を調査するのに役に立つ資料となるわけである。

さて、その付加価値というのは、文部省による新しい地名の表記法を地図の作成者が実行し、教育者がそれに基づいて教育を行うに当たって、この表記法への理解を深め、また新たな地名表記を随時容易に参照出来るようするための、言わば「オマケ」の部分である。そしてそのメインは、北米に始まりアジアまで計二十頁に渉って掲載された、「2、地名の正しい書き方による外国地図」であり、その頁数は全体の半分近くに及んでいる。

新しい地名表記法の詳しい解説と各国地名の具体的表記例一覧は、他の出版社による冊子にもあった。しかし、地図の形の参考資料を提供しているものは、この第一法規のものだけである。他の冊子が文字による付加価値を加えているのに対して、この冊子は地図を別途作成しているのであるから、編集の手間を格段に費やしている。配布分以外に販売分を用意したくなる所以であろう。また使う側にとっても、ある地名の新しい表記を探すのに、地図の形で参照出来ることは大変便利であるとも言える。

さて、西洋を含め他の地域については、この地図に特に違和感はない。例えば「イタリア」が「イタリヤ」になっても、「フィリピン」が「フィリピン」になってもそれほど違和感はないわけである。ところが、殊に中国に限って言えば、それまでの地図とはその様



図2

ビの如く蘇つてこないことを祈るのみである。

次に中教出版のものを見てみよう。

『外国の地名の表記』

中教出版株式会社

一九六〇年九月序刊 50頁

というものである。奥付等は一切無いが、序文に一九六〇年即ち昭和三十五年の九月とあるので、他の三社に比べてやや遅いということになる。この冊子の特徴は、まず装丁方法が和本風な所謂「袋綴じ」になっていることである。綴じ方は所謂「平綴じ」だ。本文は和文タイプだと思われる。こうした簡便な製作方法は、安価に大量に製作

して広く配布するためなのであろう。

また本冊子が、新たな地名表記の方針や基準や細かな解説といったことを全て省き、単に主要地名の検索という単一の目的に絞っている点も、他の三社のものに比べて際だった特徴だと言えよう。その前書き「この資料について」に曰く、

この資料では、その「手びき書」(前掲文部省『地名の呼び方と書き方《社会科手びき書》』)のこと。明木注)を、使用に際していくらか便利にするために、地名例の排列を五十音に編成す

相を一変しているのである。図2をご覧いただきたい。そう、漢字は一切無し。全て中国語読みを示すカタカナばかり。これこそ、当時の地図帳が目指した理想の姿だったのである。この冊子は、今後の地図はこのように作りましょう、というまさにその見本を示している。その後の実際の地図帳はカッコ入りとは言え漢字表記を残しているのだが、しかし文部省の当初の方針が「当分の間、漢字をあわせ示しても差し支えない」であったことを忘れてはならない。最終的にはこのようなカタカナだけの中国地図を作りたかつたわけだ。この地図がゾ

るなどの手当てをするほかは、用例などは「手びき書」の域を出ておりません。(ただし、中国については若干の地名を補いました。) いずれ、用例を増補し、通則なども網羅し、完全なものを作成する際の基礎となれば幸いです。

そして本文は、三十九頁までが「一般外国」、その後に「中国」「朝鮮」「樺太および千島」「日本の近海」が別項目として立ててある。やはり漢字表記の地名は分けて目録にしてある方が検索に便利だ。文部省の『手びき書』もそうになっていた。

では文部省の『手びき書』の使用を「便利」にするために施した本冊子の「手当て」とはいかなるものだったかを確認しておこう。

「一般外国」

文部省『手びき書』

地域別

綴り字↓カタカナ表記の対応

a b c 順で配列

中教出版冊子 地域別に分けず

カタカナ表記↓綴り字の対応

アイウエオ順で配列

「中国」「朝鮮」「樺太および千島」

文部省『手びき書』

漢字↓カタカナ表記の対応

(一部は 綴り字↓カタカナ表記)

従来の読み方のアイウエオ順で配列

中教出版冊子

配列法は文部省『手びき書』に同じ

但し、中国については『手びき書』に無い

地名を三十八箇所追加し、さらに『手びき

書』の配列順の誤りを数箇所訂正している。

これを要するに、「一般外国」(非漢字地名)については文部省『手びき書』とはカタカナ↑綴り字の対応を逆にしており、日本語の外来語としての表記から綴りを検索出来るようになっていた。また「中国」「朝鮮」「樺太および千島」(漢字地名)については文部省『手びき書』地名の例を追加し、またアイウエオ配列の誤りを正し、文部省『手びき書』を補って使えるようになっていた、ということが言えるのである。つまり本冊子は、袋綴じの平綴じという簡易な外見にもかかわらず、実際に地図を作成し運用する人が文部省『手びき書』と併用して用いるのに大変便利な冊子となっているのである。編集者の意図もまさにそこにあつたと言える。

具体的に本冊子で追加されている地名は以下の如くである。

永定河	ヨンティン川
温州	ウエンチョウ
海南島	ハイナン島
花蓮港	ホワリエンカン
韓江	ハン川
環江	ホワン川
咸陽	シェンヤン
錦州	チンチョウ
桂江	コイ川
興安嶺	シンアンリン山脈
広西省	カンシー省

黄埔	ホワンブー
江陵	チャンリン
湖広平野	フーコワン平野
五台山	ウータイ山
葫蘆島	フールータオ
沙市	シャーシー
山海関	シャンハイコワン
舟山列島	チョウウシャン列島
宿県	スー県(省城の場合はスーシエン)
遵化	ツンホワ
順徳	シュントー
昌黎	チャンリー
秦嶺山脈	チンリン山脈
崇明島	チョンミン島
仙霞嶺山脈	シエンシャリン山脈
大同	タートン
淡水	タンシヨイ
微山湖	ウェイシャン湖
閩江	ミン川
伏牛山脈	フーニウ山脈
澎湖諸島	ポンフー諸島
渤海湾	ポーハイ湾
蒙山	モン山
洛河	ルオ川

灤河 ロワン河
 楼山山脈 ローシャン山脈
 呂梁山脈 リュイリヤン山脈

また、配列順が訂正されている場所は以下の如くである。

広東省 『手びき書』が「かんとん」の読みで「か」の項目に置いていたものを、「こうとう」の読みで「こ」の項目に移動。

Gobi Desert 『手びき書』が「つび」の読みで「古北口」こほくこう」の後に置いていたものを、「湖南」こなん」の後・「湖北」こほく」の前に移動。

中国(チュンクオ) 『手びき書』が本文中「ち」の項目に置いていたものを、タイトルに移動

漢口 『手びき書』が「はんこう」の読みで「は」の項目に置いていたものを、「かんこう」の読みで「か」の項目に移動。

蘭州 『手びき書』が「らんしゅう」の読みで「洛陽」らくよう」の後・「Lhasa(拉薩)」の前に置いていたものを、「灤河」らんが」の後・「遼河」りようが」の前に移動。

これらの文部省の『手びき書』に対する補足・訂正はまさに本冊子の付加価値であり、編集や教育に携わる人が『手びき書』と常に合わせ用いるのに便利なものであったと言える。丁寧^{ていねい}に編集されていたことがうかがえ、単なる粗品の域を超えている。但し、「灤河」は文部省の基準によるならば「ロワン川」であるべきところがここのだけ「ロワン

石 家 莊
 浙 江 省
 仙 霞 嶺 山 脈
 錢 塘 江
 西 (Shensi) 省

シ ー チ ャ チ ヨ
 チ ョ ー チ ヤ ン 省
 シ エ ン シ ヤ リ ン 山 脈
 シ エ ン シ ー 省
 チ エ ン タ ン 川

図3

この冊子のように下線を以て明示してくれば、関係者にとってはありがたいことであつたと思われる。但し、文部省の『手びき書』の基準によれば、
 永定河Ⅱヨンチン川
 であるべきところが、

永定河Ⅱヨンティン川

「河」となっていて、当時この新しい地名表記を正しく提示するのはなかなか面倒な作業だったんだと、関係者のご苦勞を察する次第である。

もう一点、本冊子で注目すべきことがある。図3をご覧いただきたい。カタカナ表記の所々に引かれた下線である。前書きに付された

〔注〕に、
 地名で、アンダーラインを施したものは、小字を表す。

とある如く、これは拗音・促音の小字を示している。これは「一般外国」（非漢字地名）にも用いられており、単に注意を促すものと考えればよいのであろうが、特に中国地名について言えば、既に触れたように文部省『手びき書』方式のカタカナが小さい「ヤ」と大きい

「ヤ」を神経質に区別していることに對して特に注意を喚起するものである点、注目しておくべきであろう。やはり中国語を知らずに「ヤ」と「ヤ」をきちんと区別するのは、よほど注意しないと難しい。事実、実際の教科書や地図帳の上でも間違っているところはたくさんあつた。この冊子のように下線を以て明示してくれば、関係者にとってはありがたいことであつたと思われる。但し、文部省の『手びき書』の基準によれば、
 永定河Ⅱヨンチン川
 であるべきところが、

永定河Ⅱヨンティン川

になつており、やや先走つたところもあるようだが。

さて以上のような、拙論(3)と本稿で採り上げた各出版社による小冊子を通覧して感じることは、やはりこの新しい地名表記が打ち出された際の関係者の驚きや戸惑いである。所謂現代仮名遣いが作られた時の混乱はしばしば耳にする。しかし仮名遣いの重要さの影に隠れて見逃されがちだが、中国地名の表記法も根本的に改められた。いきなり「河北省Ⅱかほくしょう」を漢字無しで「ホーペイ省」としなければならぬ、「渭水Ⅱいすい」を「ウェイ川」としなければならぬ、その一方で「黄河」は「黄河」のまま、「揚子江」は「揚子江」のまま、ということになつたわけである。今までの地図も作り替えねばならない、今までの教え方も変えなければならぬ。関係者の戸惑いはさぞ大きかつたことだろう。そうした時に、これらの冊子があれば大変役に立つたことは想像に難くない。文部省の『手びき書』に無い詳しい解説が加えられていたり、しかもそれが文部省が各出版社を呼んで説明した時の内容であつたり、また『手びき書』とは違う方法で検索出来るようになっていたり、『手びき書』の誤りが訂正されていたり、また地図のサンプルが載つていたり……。これらの冊子はそうした付加価値を備えた、それぞれに便利な資料であつた。これらはもちろん、自社の教材を売り込むための営業上の目的もあつて作られたものであろう。しかし一方では、新たな地名表記を実践するには、こうした資料が欲せられていたとも言えるように思う。

三、戦前の資料について

さて続いて、最近になって古書店で入手した戦前の資料を幾つか紹介したい。まず、

資料1

西脇健治郎『支那地名正しい讀方と解説』

附 支那詳図・支那地歴要覽・支那事変要覽

積善館発行 86頁

昭和十三年十一月十九日印刷

昭和十三年十一月二十三日発行

というものである。著者については詳細は不明。本書の目次は各編の概要を付す詳細なもので、これにより内容を概観してみたい。

目次

第一編 地方別(省別)配列 — 漢・支・英音對照

某地方について所在の漢字書き地名が如何なる漢・英・支音にて讀まれるかを對照する。各省、各地方、各項内の地名はすべて北から配列する。

北支—中支—南支—邊境—地勢—交通—附・地理用語—

附・滿州國地名

第二編 漢讀五十音順配列 — 英・支音及び位置索引

地名を漢讀による五十音順に配列してその位置と該當する英字及支那音を檢索し得る様にしてある。

第三編 英字ABC順配列 — 英漢對照及び位置索引

英字にて示されたる支那地名をアルファベット順に配列して各々に該當する漢字を示し且その位置をたやすく地図上に求められる様にした。

第四編 主要地名の解説

主要地名の解説を漢讀五十音順に配列し、各、番號を附して對照に便した。

附1 支那地名異稱及略稱一覽

省名及主要都市の異稱を省別にあつめてある。

附2 下地理歴史要覽

日滿支主要都市人口、日滿支面積人口、中國貿易、中國對日貿易、支那の不割讓地、列強の領地、租借地、租界ある都市、日支交通距離對照。

①北支大地圖 ②中南支大地圖

附3 支那事變要覽

支那事變の原因、日本の目的、支那の政策、列國の動向、戰局進展國際關係推移、政府の重大聲明、時局の重大性、銃後の赤誠、國民精神總動員等。

本書が刊行された昭和十三年(一九三八)と云えば、國家總動員法が發布された年である。また本書巻末の廣告によると、著者には別に『時局讀本 支那事變の認識と國民の覺悟(附録 支那事變參考大地圖)』『作業本位 支那事變地圖』『最新支那事變參考地圖』という著書もあるとのこと、本書はそのような時局にあつて、時事問題を理解するための参考書の一つとして作成されたようである。そしてその第一編の「漢・支・英音對照」で提示されているのはまさに中國地名

の漢字表記、日本音読み、中国語読みによるカタカナ表記、それに郵政式ローマ字綴りの対応表である。これは、中国地名を中国語読みのカタカナで表記する、という考え方が、しかもそれを地名一覧表などの形で統一的に提示する、という試みが、戦前から既にあつたということを示している。

では、本書の内容を概観してみることとしよう。その「はしがき」に次のようにある。

日滿支不離一體、共存共榮以て東洋永遠の和平を確立し、東洋の盟主として世界文化の發展に寄與すべき大日本の使命は實に重

い。なるほど、出だしから大変勇ましい。続いて曰く、

これが達成には國民擧つて隣邦支那を眞によく理會する事を要する。然るに支那の歴史・地理・政治・經濟・文化・人事百般はすべて支那の土地を離れては存在しない。故に此等の探求には必ず地名の正しい読み方を知り、地圖上にその位置を検索する事が必要となる。

それはまあごもつともだ。拙稿の主題からは外れるが、本書の狙いは、支那地名は支那語読みで読めという以外にもう一つ、その地名が地図上のどこにあるかを知れ、ということにある。この時局にあつて人々が支那の有名な土地の場所をろくに知らない、ということへの憂慮が本書の執筆の一つの動機となつていたのであろう。単なる地名一覧に終わることなく、わざわざ折り込みの地図を付し、地図上のグリップの番号により地図上の位置が探せるようになってゐるのは、そのためである。

続けて「はしがき」には次のようにある。

支那地名を支那で通用しない漢音で讀む事は、單なる机上の概念的な遊戯に過ぎない。これ眞に支那事情を明かにする所以ではない。

本書に於いて著者は「漢音」を、特に嚴密に呉音・漢音・唐音の「漢音」を指すものではなく、漢字の（日本語の）音読みというくらいの意味で用いているようである。さて漢音では支那で通用しない、机上の空論である、ゆえに支那音で讀むべきである、というこの主張、どこか既視感を覚える言い方ではなからうか。さらに、

文部省が學校教育に對して支那地名を正しい支那音で教へる様特に要望する所以も、これに他ならぬ。

とある。おお、これはなかなか鼻息が荒い。学校でもこのカタカナ讀みで教える、と主張なさつてゐるわけである。著者の言われる「學校教育」というのが具体的に初等教育のことなのか高等教育のことなのか、ここだけでは定かでないが、本書巻末の広告に載つてゐる本については「中等學校・青年學校・小學校」或いは「中等教育」向けであることが書いてあるので、本書もおそらくそうなのであろう。今でこそ外来語ということに対する敷居が低くなつてゐるが、戦前の小中学生に對して支那音で覚えさせるというのはどうだつたのだろうか。拙論(4)で戦前の尋常小學校・高等小學校で使われた地図帳にもひと言触れた。小學校用だけにその支那の頁に記された地名の数はわずかなものである。もちろん漢字のみ。授業では従来の普通の讀みをしたはずである。これを支那音カタカナにせよ、という主張は確かに當時としては進歩的で革新的なものであつたらう。しかしこのわずかな主要

地名を支那音で教えるためには教材や指導方法に相当な改革が必要だったはずだ。我々が見た通り、終戦後昭和二十年代のカタカナ化に際しては、国語審議会や文部省がかなりの手間をかけて、ある意味周到に用意をしていた。全面的に読み方を変えるには、それだけのコストとリスクがあるのである。本書のように、これからは支那音で読みましょう、はいそうですか、と簡単に済むことではない。それこそ「机上の遊戯」であるように思えて仕方が無い。もちろん一方では、実務的なカタカナ表記というものもあるものであって、これについては後ほど触れる。

さて、本書で用いられている中国語音節のカタカナ表記を一見したところ、例えば、

山東 ^{サント} シアントン Shantung

と、「山＝shan」ががしばしば用いられる「シヤン」ではなく「シアントン」となっているなど、やや特徴的な書き方が採用されているようである。そこで細かく見ようとすると早速、

山西 ^{サンセイ} シヤンシー Shansi

というのに出くわす。同じ「山＝shan」に「シアン」「シヤン」が混在しているのである。もちろん全く同じ音であり、書き分ける必要は無い。また日本語の音読みを示すルビも「トー」「セイ」と不統一である。おやおやと、他の地名もざっとチェックすると、

「Tien」に「チイエン」と「テイエン」がある

天^{テン}山^{ザン}北路 ^{ペイ}チイエン シヤン ペイルー Tianshan bei lu

天^{テン}山^{ザン}南路 ^{ナン}チイエン シヤン ナンルー Tianshan nan lu

天^{テン}山^{ザン}山脈 ^{ミン}チイエン シアン シアン モー Tianshan Mts.

「川＝チオアン」の英字表記が不統一

四川 ^{シチワン} スーチオアン szechuan

龍川 ^{リュウセン} ルンチオアン lungchun

鄧川 ^{トウセン} テンチオアン tengchwan

「江＝kang」に「チヤン」「チアン」が混在している

チヤンのもの 黄浦江・贛江・湘江・沅江・沅江・嘉陵江・岷江

チヤンのもの 揚子江・漢江・閩江・珠江

などなど、たちまち疑問点に行き当たる。いずれも単なる誤植に類するものではあるが、その数たるや看過し難い。他にも、

「lung」はトン、「lung」はルン

通州 トンチオウ ⁽⁷⁾tunchow

龍口 ルンロウ lungkou

とある。同じ韻母であるから区別する必要はなさそうなのだが、もしかすると声母によって著者が意を以て区別しておられるのかも知れない。また貴州省の「桐梓」県が、

桐梓 ^{トウシ} トンツェ tungtze

となっているのだが、まず「梓」の日本語読みは「シ」である。

「シン」ではない。さらにウェード式の「tze」は漢語拼音方案では「zi」であり、「ツェ」というカタカナ表記はあり得ない。おそらくウェード式の「tze」の綴りに引きずられたカタカナであろう。一方、山東省の「淄川」は

淄川 ^シ ツーチオアン tzechwan

となっており、「tze」は「ツー」と読んでいる。このあたりは、中国語をご存じない方が素案を作られ、中国語の専門家が校閲なさる、そ

の過程で見逃しがあつた、といった原因が考えられよう。いずれにせよこのままでは、残念ながら本書のカタカナ表記の規則や特徴を云々するのは困難である。もちろん、かくも不統一な状態で、学校教育にこの読みを採用せよ、というのはかなり無理なことだと言わざるを得ない。ただ、「江」の英字表記は郵政式ローマ字の「Kiang」を採用しつつ、それを「キアン」ではなく「チャン」「チアン」としているなど、実際の中国語読みに準じた編集がなされていることは事実として認めてよからうと思う。

以上本書を通覧して感じることを二三まとめておきたい。従来の地名の読み方ではないけない、現地を通じる読み方をしないと意味が無い、という主張、そしてそれを学校教育で採用せよという主張、これは不思議なほどに昨今のカタカナ主義の主張と類似している。今と同様の考え方は戦前からあつたのである。ただ面白いのは、それが日満支の共存共栄、東洋の盟主としての大日本、ということをその根拠としていることだ。所謂大東亜共栄圏の確立ということであろう。昨今のカタカナ主義者の人々の主張とは必ずしも相容れない戦前の思想も、結果的にカタカナ主義に行き着いた。つまり、大東亜共栄圏を確立しなければならぬ、ゆえに隣国を理解しなければならぬ、よってカタカナで表記すべきだ、という言い方と、隣国と仲良くしなければならぬ、現地の人の読む通りでないと失礼だ、よってカタカナで表記すべきだ、という言い方とは、いずれもそれぞれの理屈に於いてちゃんと成立してしまう、ということなのである。残念ながら、言葉やその表記というものは、政治やイデオロギーからは切り離せないもの⁽⁸⁾のようである。

但し、本書の主張が戦後のカタカナ表記と決定的に異なることがある。それは、既に見たように戦後のそれが漢字を廃止してカタカナのみということを指向しているのに対して、本書の主張は漢字表記を排除しようとは全くしていないということである。本書のとびらにある「支那地名の支那読み」に次のようにある。

言語の通ずる事は思想の融合であり、且、親善の捷徑となる。

吾人は支那の地名は支那で通ずる讀方に従はねばならぬ。(中略)：本書はその通用し難い邊境や南支の一部を除き、主にこの北京語の讀方によつた。

ここにあるように、本書では一貫して読み方が問題にされている。もつともこのカタカナを読めば支那で本當に「通ずる」のかどうか、全く保証の限りではないが、少なくとも漢字を排除してカタカナで表記するという主張はなされていない。それはやはり、支那で「通ずる」ということが眼目だからなのであろう。カタカナで書いては却って通じなくなる。書くのは漢字、しかし読み方は支那語読み、という点では一応筋は通つていると言えよう。翻つて戦後、昭和二十年代の国語審議会や文部省は、漢字を使わずにカタカナで書くことを意図していた。そこには「通ずる」こととは別の、漢字廃止・制限というもう一つの目的が加わっていたのである。

さて本書には、支那でも通ずる読み方をする、という実用面が盛り込まれていた。今の我々から見れば、特に外国と直接行き来するわけではない当時の一般庶民に学校で支那語読みを教えることは、決して実用的だとは思えないのだが、隣国と仲良くとか、現地音で読むのが礼儀だとかいう理念的な主張ではなく、大東亜共栄圏という政治的主

張に基づきつつも、実務的な主張にも片足を置いていっていると云ってよからう。

戦前の中国地名のカタカナ表記を調べていると、漢字廃止の意図の有無という点では必ずしも戦後のそれと直接繋がっていないが、表記の仕方や実務面の必要性などについては、戦後の動きと意外と繋がっていることを感ずる。次にそうした実務面に関わる戦前の資料の一部を見てみようと思う。

ここで採り上げるのは「支那人名地名集」の類の資料である。ここでは以下のものを例に挙げる。

資料2

a 『支那重要人名及地名支那音輯録』⁹⁾

大蔵省理財局国庫課 大正十一年(一九二二) 78頁

b 『支那人名地名支那音輯録』

大蔵省理財局編纂 大正十二年(一九二三) 149頁

印刷局内・朝陽会

c 『支那人名地名支那音輯録』

大蔵省理財局編 大正十四年(一九二五) 76頁

『支那人名地名支那音輯録』については同じタイトルで内容と頁数の異なるものが確認出来た。また類似した書名の『支那重要人名及地名支那音輯録』もある。内容を見るに、大正十二年の『支那人名地名支那音輯録』は大正十一年の『支那重要人名及地名支那音輯録』の増補だと考えられ、大正十四年の『支那人名地名支那音輯録』は大正十二年のそれとはかなり体裁が異なる。もつとも三者とも同じところで編纂されたようで、繁を避けるためここではそれぞれ資料2のa b cと

呼んで区別することとする。

さてこれらの冊子はいずれも大蔵省理財局で編纂されている。支那人名地名の支那語読みハンドブックが理財局で作られた経緯については、後で考察する。それぞれの内容はおよそ以下の如くである。

a 『支那重要人名及地名支那音輯録』(縦組み、右綴じ)

重要人名ノ部

日本語音読みのイロハ順配列

姓名の漢字表記、支那音カタカナ表記、ウエード式ローマ字、官職を示す。

重要地名ノ部

日本語音読みのイロハ順配列

地名の漢字表記、支那音カタカナ表記、ウエード式ローマ字(もしくは郵政式拼音)、省別を示す。

附録

一、人名ABC索引

ABC順配列

姓名のウエード式ローマ字、漢字表記、官職を示す。

二、地名(ABC)索引

ABC順配列

地名のウエード式ローマ字、漢字表記、省別を示す。

折り込み付録

中華民国重要職員表

見返し部分に貼り付け

大總統・各大臣等政府要職の人名一覧

b 『支那人名地名支那音輯録』(縦組み、右綴じ)

一、人名ノ部

日本語音読みのイロハ順配列

姓名の漢字表記、支那音カタカナ表記、ウエード式ローマ字、経歴、出身地を示す。

二、地名ノ部

日本語音読みのイロハ順配列

地名の漢字表記、支那音カタカナ表記、ウエード式ローマ字(もしくは郵政式拼音)、省別、位置(経緯度)を示す。

附録、ABC索引

人名ノ部

ABC順配列

姓名のウエード式ローマ字、漢字表記、経歴、出身地を示す。

地名ノ部

ABC順配列

地名のウエード式ローマ字、漢字表記、省別、位置(経緯度)を示す。

c 『支那人名地名支那音輯録』(横組み、左綴じ)

(甲) ABC索引 見出し語のABC順索引

一、人名ノ部

二、地名ノ部

(乙) イロハ索引 見出し字の日本語音読みイロハ順索引

一、人名ノ部

二、地名ノ部

一、人名ノ部

ウエード式ローマ字配列

日本語音読みのイロハ順配列

ウエード式ローマ字、姓名の漢字表記、支那音カタカナ表記、字、略歴、出身地を示す。

二、地名ノ部

ウエード式ローマ字配列

ウエード式ローマ字(もしくは郵政式拼音)、地名の漢字表記、支那音カタカナ表記、省別、を示す。

cは、本文がウエード式ローマ字のABC順配列となっているので、横組み・左綴じとなっている。但し、全体は横書きでありながらも、ルビの形で示されている支那音カタカナが、親字の右横に付されているのが面白い(図4)。

さてこれらの人名地名集は、単なる支那語の読み方を記した一覧表ではなく、人名については官職や略歴、出身地や字^{あざな}まで示し、地名については省別や経緯度まで示している。つまり、非常に実用性の高いも

支那音	姓名	字	略歴	出身地
Chao Jung-hua	趙榮華		前陸軍第十八混成旅長	山東
Chao Ping-lin	趙炳麟	竺垣	山西實業廳長	廣東
Chao Ti	趙倜	周人	元河南督軍(5-11)	河南
Chè Ching-yün	車慶雲		前京師憲兵司令	奉天
Chên Ch'ên-hsien	陳振先	鐸時	元農林總長(1-2)	廣東
Chên Chi-hsiang	陳際翔		京兆政務廳長	

図4

のであったと言える。日本語の音読みから引く索引も、支那語のローマ字から引く索引も、両方用意されているのはそのためであろう。

さて、特に本稿で問題にしている中国語音声のカタカナ表記について、これらの資料 2-1 a b c のカタカナ表記法を見るに、さすが官公庁で作成されたものだけあって、先ほどの資料 1『支那地名正しい讀方と解説』のような表記の不備や不統一はほとんど見当たらない。その表記の原則は、本稿でしばしば触れた戦後の国語審議会や文部省の書き方便覧とはまた違う書き方になっているが、戦後ものものは新たな仮名遣いに準拠したものでから、戦前の書き方がそれと異なるのは當然のことである。しかし、細かく見ると幾つか面白い点に気づく。例えばこれをご覧いただきたい。

昌 チヤン
山 シヤン
長 チヤン
房 ファン
江 チヤン (キヤン)
襄 シヤン
疆 キヤン (チヤン)
郷 シヤン

ご覧の通り、小さい「ヤ」(拗音)と大きい「ヤ」(直音)が区別されているのである。ここに挙げた例では、[chan] [shan] [chang] [fang] は「ヤ」, [jiang] [xiang] [kiang] [qiang] [qian] は「ヤ」になっている。つまり「i 介音」の有無によって書き分けているので

ある。「エ」と「エ」についても同様で、

陳 チェン
錢 チェン

のように区別されている。「chen」は「チェン」で、「qian」は「チエン」と書き分けていることが分かる。

この「ヤ／ヤ」の区別については、前稿で既に何度も触れた。これは昭和二十年代の国語審議会や文部省による中国地名の書き方の基準が定めていたことであり、その後も学校地図帳の中国地名カタカナ表記に於いては「ヤ／ヤ」が神経質に区別されている。さらに平成に入ってからこれを「ア」と書く(つまり「チアン」と書く)よう改訂されて、さらなる混乱を生んでいる。テストで「遼東半島」を「リヤ、オトン半島」と書いたら×にされた、正解は「リヤ、オトン半島」だった、という体験を持つ学生は一人や二人ではないのである。そして現在では「リア、オトン半島」と書くのが正しい、ということになっているわけだ。

このことに触れた際、私はこの「ヤ／ヤ」を区別するというアイデアは、国語審議会の建議「中国地名・人名の書き方の表」(昭和二十四年)あたりに始まるのだろうかと思案と考えていた。しかし右の資料 2-1 a b c が既に「ヤ／ヤ」を区別しているの見出した以上、その推測を改めざるを得なくなった。このアイデアは、戦後のカタカナ主義の作り出したものではなく、実は戦前からの伝統であったと言ふことなのである。その意味では、中国地名は中国語の読み方で読むべきだという基本的な考え方のみならず、その細かい書き方のクセまでもが、戦前から受け継がれている面が少なからずあるというこ

と言えそうなのだ。¹⁰資料2-1 a b cの「ヤ／ヤ」の区別は全体を通して一貫しており、中国語を知らない人間が適当に書いたようなものでは決してない。ウェード式の「ju」を「ジュ」などではなく「ルウ」と書いているところを見ても、決して素人の仕事ではなからう。カタカナで書くことの是非とは別の問題として、こうしたカナ書きの方式にも興味深い点がある。いろいろありそうなのだが、これはいずれ稿を改めたいと思う。

もう一点、別の角度から資料2-1 a b cを論じてみたい。aの資料には挨拶状が一枚挟み込まれている。その全文は次の如くである。

我々カ支那ニ關スル外國語ノ新聞雜誌等ヲ讀ム場合又ハ外國人ト談話ヲ交フル際最モ困難ヲ感スルノハ我々カ支那ノ人名或ハ地名等ノ支那音ヲ解セサル點デアリマス例ヘハ吳佩孚ノ如キ我々ハ普通「ゴハイフ」ト呼ヒマスケレトモ支那音テハ「ウーペイフ」ト云フ如ク一度斯カル人名カ談ノ中ニ出テ來ルト此ノ一語ヲ解セサル爲メニ會話ヲ續クルコトカ出來ナクナルト云フ場合カ尠ナクナイノデアリマス此ノ事ハ先般私カ外遊中親シク實驗シテ痛切ニ其ノ不便ヲ感シタノデアリマス就テハ今後ハ雜誌新聞ノ振假名ハ勿論日本人同志ノ日常ノ談話ニ於テモ支那ノ人名地名丈ハ少クトモ邦音ヲ避ケ支那音ヲ使用スルノ習慣ヲ養ヒタイモノト思ヒマス依ツテ茲ニ現代支那重要人名竝ニ地名ノ支那音ヲ輯録シ聊カ同憂ノ士ノ參考ニ供スル次第デアリマス

この次の行に日付と署名があるらしいのだが、国会図書館の所蔵本で

はこれを本書に貼り付けておくためのテープがここに被さっており、署名の主は確認出来ない。但しよく見ると、この挨拶状の左下に「冨田」の印鑑が捺されていることが確認出来る。

さらに、私の研究室所蔵の資料bにも同様の、aよりも字数の多い挨拶状が挟み込まれていた(図5)。その全文は次の如くである。

本書を贈呈するに就き一言

外國の人名地名を翻譯して讀む位非常識な事はあるまい、しかるに支那に對しては日本人は昔よりこの非常識を行つて居るのである、袁世凱を「エンセイガイ」と云ひ吳佩孚を「ゴハイフ」と云ひ、長沙を「チョウウサ」と云ふ、これでは外國人には勿論支那人にも通用しない、昔時日本の國名を外國人が「ジパング」と聞き間違へてそれが訛つて「ジャパン」となった、「ジャパン」では英語を教つた日本人でなければ自分の國の事だと云ふことが解らない、近頃は氣の利いた外國人は段々「ニッポン」と發音する様になつた、支那の人名地名の日本讀は理窟上譯の分らぬ可笑しなことであるのみならず實際問題として非常な不便を來す事となるのである、日本人が「チャウサクリン」(張作霖)と云ふ、外國人には誰のことか解らない、外國人が「ソンウエン」(孫文)と云ふ、日本人で直ぐ誰の事か解る人が何人あるか、先年或宴會で英國の大使が當時の大總統黎元洪「リウユワンホン」の談を始めた處日本のさる大臣が「リウユワンホン」とは誰の事かと隣席の人に尋ねたと云ふ珍談さへある、こんな事では日本人の口癖の同文同種や日支親善も甚だ心細い次第である、現に小生も昨年来

國華府にありて米國人と支那の時事を談ずるに當り米國人が支那將來の大立者として「チェンチュウミン」陳炯明の事を話し始めた。處小生その何人なるかを解らないで大に恥を掻いた事があつた、その他外國語の書物を讀む時に同じ様な不便を感じるのである、それで我國民のこの陋習を一掃し支那の人名地名は平常より支那音にて發音する習慣を養ふの必要を痛感し先ず本書の編纂を企圖し其の成るに及んで之れを印刷局内朝陽會で印刷に附しこれを小生私の資格を以て全國の主なる學校及新聞社に寄贈し本運動に對する御助勢を御願する所以である、何卒學生に對しては平常より支那の固有名詞は支那音で發音する様習慣を付けられ又新聞雜誌等の振假名も同じく支那音による事に實行されん事を切望するこれが本運動を推進する最捷徑なりと信ずるからであります、東京の一二の新聞は已にこの主義を實行しつゝあります、尙本書は印刷局内朝陽會で實費壹圓參拾錢で頒つ事になつて居ります。

大正十二年初夏

富田勇太郎 識

大藏省理財局國庫課に於て

殿

両者ともに「呉佩孚」を例に挙げている点、そして何よりもそこで主張されている内容が同一である点から、aの資料の印鑑に見える「富田」は、bの富田勇太郎その人のものであつたと判断出来る。

富田勇太郎（一八八三〜一九四六）。大正から昭和にかけての官

本書を贈呈するに就き一言

外國の人名地名を翻譯して讀む位非常識な事はあるまい、しかるに支那に對しては日本人は昔よりこの非常識を行つて居るのである、袁世凱を「エーセイカイ」と云ひ吳佩孚を「ゴハイフ」と云ひ、長沙を「チャウサ」と云ふ、これでは外國人には勿論支那人にも通用しない、昔時日本の國名を外國人が「シヤング」と聞き間違へてそれが訛つて「ジャパン」となつた、「ジャパン」では英語を教つた日本人でなければ自分の國の事だと思ふことが解らない、近頃は氣の利いた外國人は段々「ニッポン」と發音する様になつた、支那の人名地名の日本讀は理窟上譯の分らぬ可笑な事であるのみならず實際問題として非常な不便を來す事となるのである、日本人が「チャウツクリン」（張作霖）と云ふ、外國人には誰のことか解らない、外國人が「ソウツェン」（孫文）と云ふ、日本人で直ぐ誰の事が解る人が何人あるか、先年或宴會で英國の大使が當時の大總統黎元洪「リーユワンホン」の談を始めた處日本のさる大臣が「リーユワンホン」は誰の事かと隣席の人に尋ねたと云ふ珍談さへある、こんな事では日本人の口癖の同文同種や日支親善も甚だ心細い次第である、現に小生も昨年米國華府にありて米國人と支那の時事を談するに當り米國人が支那將來の大立者として「チェンチュウミン」陳炯明の事を話し始めた處小生その何人なるか解らないで大に恥を掻いた事があつた、その他外國語の書物を讀む時に同じ様な不便を感じるのである、それで我國民のこの陋習を一掃し支那の人名地名は平常より支那音にて發音する習慣を養ふの必要を痛感し先ず本書の編纂を企圖し其の成るに及んで之れを印刷局内朝陽會で印刷に附しこれを小生私の資格を以て全國の主なる學校及新聞社に寄贈し本運動に對する御助勢を御願する所以である、何卒學生に對しては平常より支那の固有名詞は支那音で發音する様習慣を付けられ又新聞雜誌等の振假名も同じく支那音による事に實行されん事を切望するこれが本運動を促進する最捷徑なりと信ずるからであります、東京の一二の新聞は已にこの主義を實行しつゝあります、尙本書は印刷局内朝陽會で實費壹圓參拾錢で頒つ事になつて居ります。

大正十二年初夏

富田勇太郎 識

大藏省理財局國庫課に於て

殿

図5

僚・銀行家で、大蔵省に入省し、大正七年（一九一八）に国庫課長となり、大正十三年（一九二四）から十年間理財局長の任にあった。昭和十一年（一九三六）より満州興業銀行初代総裁となる¹²。そうすると、こうした中国地名・人名の支那語読みを集めた冊子が、大蔵省の理財局から発行されていた事情がだんだん分かってきた。大蔵官僚であり、後に金融恐慌による混乱の收拾に活躍し、満州興業銀行総裁となった富田が、自らの公務の中で外国人と接する度に痛感していた問題、即ち外国語の中に中国の地名人名が出て来た場合、日本での読み方しかなかったと話について行けない、という問題を解決するために、本冊子を作成したということなのである。それが職務上外国人に接する人々の実務上の手助けとなることを意図したことは、増補しつつ、体裁を変えつつ、何度も発行されていることからもうかがえよう。

私はこの富田の主張が、我々がここで考えつつある中国固有名詞の表記のあり方に関して、幾つかの面で非常に重要な意味を持っていると考えている。冊子を配布する際の挨拶状二枚からだけではあるが、富田の考え方を少し検討してみよう。

まず無粋ではあるが敢えて問いたい。では、日本人が「リーユワンホン」とか「チェンチュウミン」とかカタカナ式に読めば、支那人や西洋人に通じるのか？ 否、とても通じるとは思えない。それはあたかも「ホワットタイムイズिटナウ」というカタカナを読んでも通じないと全く同じことだ。ましてや「日本人同士の日常の談話」でもこの支那語読みを使い、「学生に対して」もこの支那語読みを教える、というのもカタカナ言葉に対する敷衍が今ほど低くなかったこと

であろう。時代に於いてはかなり難しかったと考えられる。またよしんばそれなりのコストをかけて教育を支那語読みに切り替えたとしても、そして仮にこの「運動」が広がりこの「主義」が普及したとしても、そのまま外国語の中で通じるという都合のよい効果が期待出来ると思えないのである。この点は右の資料1『支那地名の正しい讀方と解説』と同様である。「ホワットタイム」式ではダメなのだ。

但し、富田が漢字表記を排除してカタカナのみにするとは全く主張していないことも注意しなければならない。「新聞雑誌等の振り仮名」とあることからそれは明らかで、この点も右の資料1と同様、戦後の漢字廃止・制限論とは一線を画している。

また富田は「人名地名を翻訳して読む」ことを「非常識」だと述べている。しかし、ある漢字を日本の音読みで読むことが果たして「翻訳」なのだろうか。例えば『紅樓夢』を『The Dream of the Red Chamber』と言う、『易経』を『The Book of Changes』と言う、といったことを名前を「翻訳」することと呼ぶのなら話は分かる。実際、『易経』を『I Ching (the Book of Changes)』と併記することも多く、書名ならばそれも当然だろう。一方人名を翻訳するとはどういうことか。例えば私の姓の「明木」を『Bright tree』と訳すようなことを言うのではないのか（一度ブライトさんと呼ばれてみたいものだ……）。人名でそんなことをする人がいないのは当たり前だ。地名もわかり。一方私の姓は中国語の中では『Ming mu』と呼ばれる。決して『Akegi』とは読んでくれない。中国語の中で明木さんと呼ばれることが「翻訳」だと言われると、大変違和感がある。ある漢字を中国語音或いは日本語音で読むということと翻訳ということとは、全

く別の話なのだ。読み音の問題と翻訳とをこっちゃんにすべきではなからう。

但し、私は富田のこの主張全体を決して否定しない。いやむしろ、戦前既に外国語の中で中国固有名詞の表記という問題に気づき、さらにその具体的な解決策を考えていたことは、高く評価すべきだと考えるのである。これはまさに富田の実務的体験から得られた実感に発したことであろう。そうなのだ。例えば英語の中に中国地名が出て来た時、日本の読み方しか知らないなどこのことだか分からない。これこそ現代の我々がしばしばぶつかる問題である。しかしそれは国際化ということが叫ばれる中で新たに生じた今日の問題なのではない。戦前からとくに認識されていた問題だったのである。

富田は漢字を止めてカタカナのみにせよとはひと言も言っていない。表記は漢字で、その読みを支那語読みにせよと言っているのだ。これも「通じるように」という実務面からすれば当然だろう。そうしてこそ支那人に対しては筆談が可能であり、西洋人との間では綴りや音声で認識出来るということなのである。ただそのために、一般人にも支那語読みを強制し、学校でも支那語読みに教えよ、という点は、私は全く賛成出来ない。せっかくそれをやっても、このカタカナでどうなるものでもない。私が評価するのは、それをこうした実用的な冊子にして人々に提供したというその点なのである。

これらの資料 2 a b c には、
日本語音読みから

↓漢字表記・ウェード式ローマ字・支那語読みカタカナを探す
ウェード式ローマ字から

↓漢字表記・日本語音読み・支那語読みカタカナを探す

という二本立ての検索法が組み込まれている。しかし支那語読みカタカナから漢字やローマ字や日本語音読みを探せるようにはなっていない。重要なのは、西洋人と西洋語で話しているの中に中国人名地名が出てきた場合、綴りを示してもらえばそれが何のことだかこの冊子で探すことができるということ、そして西洋人と話していてこちらから中国人名地名を話題に出したい時、日本語の読みから綴りを探して相手に示すことができる、ということなのである。それを考えれば、この冊子はかなり実用的に使えたはずなのだ。人名に官職や経歴や字が、地名に省別や経緯度が、それぞれ加えられていたことも、実用性をより高める要素である。人の官職はその時々で刻々と変わる。何度も改訂・増補されているのもその実用性の故であろう。そうすると、当時の政府人員・外交官・貿易関係者などが外国人と接する場に赴く際、これらの冊子の一つを携帯していればそれなりに役立ったと考えられる。そして、日本人全員が支那語の読み方を把握しているなどということは前提とされていないので、支那語読みから探すような索引は必要無かったということなのだろう。我々が何度も採り上げた戦後の文部省の地名表記の『手びき書』だが、あれは教科書や地図帳等に於ける表記の手引きであって、外国人と接する時のガイドブックとしては役に立たない。漢字とカタカナしか書いていないから、ローマ字綴りを探せないのが西洋人に示すことはできないし、カタカナを読んでももちろん通じない。そもそも「淮河」が「ホワイ川」と書いてあるような手引き書が、外国人とのコミュニケーションに使えようはずもない。一応ローマ字とカタカナの中国語音節対応表は用意されている

が、個々の音節の一覧表では実際の地名や人名にたどりつくことはま
ず不可能だ。富田の作った冊子と、戦後の文部省の手引き書は、全く
その性質を異にしているのである。

考えるに、富田が直面した問題意識は、今の我々にとっても全く変
わらないものである。外国人と接する機会が増え、外国語学習も普及
した今日、もっと多くの人々が直面する可能性が高まっている。外国
語の中に中国固有名詞が出てきた時にどうするか、その対策が中国語
読みのカタカナ表記だけ、というのは甚だ心許ない。「ホワットタイ
ム」式では通じないのである。富田の作った冊子は、「ホワットタイ
ム」式のカタカナ語を口にするために役に立つのではない。そこ
に出てきた中国の地名や人名がどこのことか、誰のことかを探すこと
の方にこそ役に立つ機能を備えていたのである。

では、現在の我々はどうすればよいか。富田の冊子は我々の手元に
は無い。それにもう情報が古い。今は、中国の地名はこのようなカタ
カナで書け、という規則があるばかりで、あるカタカナ地名がどこの
ことかを探せるようなハンドブックはほとんど無いし、外国語の中に
出てくるローマナイズされた中国地名がどこのことかを探せる資料
も、一般にはなかなか入手が難しい。しかし読者諸氏はお気づきであ
ろう。我々には当時の人々には無かった強力な武器があるのだ。つま
りネット上の検索である。

残念ながら現在、中国語を知らない人でも、中国の地名のカタカナ
表記やローマ字表記を確実に検索出来る、統一された基準で編集され
たサイトは無い。「ウィキペディア」の中国地名各項目には中国語発
音を示す「カタカナ転記」の項目があったり無かったり、あっても同

じ音節に対するカタカナがばらばらだったりしている。例えば、

広州市⇨グアンチョウシ

広東省⇨グワンドンシヨウ

広西⇨コワンシー（「広西チワン族自治区」の項目）

広西⇨グアンシー（「広西省」の項目）

と、同じ「広」に対して「グアン」「グワン」「コワン」「グアン」が
あるのだ。^⑬これではあるカタカナ表記がどこのことか、確実にヒッ
トするとは限らない。もつとも、自由に書き込めるオンライン辞書で
はやむを得ない面があるが……。

もしも、例えば中国地名について、少なくとも学校地図帳に載って
いる範囲の地名について、漢字（日本の常用字・正字体・簡体字）、
地図帳式カタカナ表記、漢語拼音方案式ローマ字、ウェード式ローマ
字が統一した書式で掲載されているウェブサイトがあったならば、こ
れは中国地名を検索するのに非常に便利なのではなからうか。そこに
福嶋亮大氏・池田巧氏制作の中国語音節表記ガイドライン方式^⑭のカタ
カナなど、その他の方式のカタカナ表記を加えておけばより便利なこ
とであろう。もしそのようなサイトがあれば、いろいろな場所でネッ
ト接続が可能となっている現代に於いて、必要な時にすぐに中国地名
が検索出来ると思われる。コンピュータからの検索以外にも、スマー
トフォンなど持ち歩き可能な情報機器が急速に普及しつつある今日、
外国人と会話をしつつすぐに中国の地名を探せる、ということも期待
出来そうだ。これこそ現代の我々にとっての富田の冊子となり得るの
である。誰も作ってくれなければ、非力ながら私が作ろうかと、現在
私のゼミの学生諸君の協力を得つつ、近い将来本学ウェブサイト内に

そうしたページを掲載すべく準備中である。これについては追ってご報告したい。

四、おわりに

以上を要するに、支那人名地名は支那語読みで読めということを中心とする戦前の資料は、外国語の中に中国人名地名が出て来た場合に、従来の日本語の呼び方し知らないとなることが直ちに認識出来ない、という実務上の実感がその制作の動機となっている。そこには、一般の日本人の会話の中でも、学校の授業の中でも、全て中国語読みを用いるべしという極端な主張も含まれているが、実際にはカタカナを讀んでも通じるはずもなく、非現実的である。しかしそれは決して漢字廃止を指向するものではなく、漢字で表記してその読みを中国語読みにすることを目指している点で、戦後の漢字廃止・制限の手段としてのカタカナとは性質を異にしている。そして、それに沿って実際に作成された冊子は、外国人とのコミュニケーションに於いて、中国人名地名を検索するの十分役に立ったと思われる。

もしも戦前の支那語カタカナ表記の内の実用的・実務的な面のみが戦後に受け継がれたならば、随分状況は変わっていたことであろう。戦後は漢字廃止・制限という全く新しい別の方向に流れが変わったのか、それとも戦前と同じ流れの上であって、漢字を排除するという新しいステップを一つ加えただけなのか、判断は難しい。

さて、他にも幾つか、中国地名のカタカナ表記に関する戦前の興味深い資料があるのだが、既に字数がふくらんでしまった。これは次号にて補足したいと思っている。

最後に、私が最近気になっている問題について簡単に紹介してみたい。事の起りは、私の授業を受けてくれている学生が夏休みの帰省中にくれたメールであった。彼は頼まれて従妹の中学生の夏休みの宿題を見てやったそうだ。その時、所謂夏休みのワークブックの地理の問題に中国地名がカタカナ表記で出題されているのを見て、早速写メを私に送ってくれたわけだ。そして、そこに踊っていたのは、

問…この川の名前は何ですか。

答…チュー川

という文字だったのである。これはびっくり。読者諸氏は「チュー川」というのはどの川のことだか分かりますか？ 私は決して望んだわけではないのだが、このところ学校地図帳のカタカナ中国地名に習熟しつつあるおかげですぐに分かった。しかし、中国語を専門とする仲間尋ねても、この「チュー川」なる河川が何のことだかみんな分からなかった。中学生の試験に出るくらいだから、そんなにマイナーな川ではない。正解は（敢えて正解と呼べさせていただくが）、

珠江

である。これなら「珠江デルタ」などのキーワードに関連して中学校の試験問題に出てくる可能性の高い河川名である。そして重要なことは、この夏休みの宿題帳には、別冊解答にもその解説文にも、「珠江」という漢字表記が一切添えられていないということなのである。

この点をメールで確認した私は、是非実物を入手したいと彼から出版

社とタイトルを教えてもらったのだが、残念ながらこれは学校向け直販のみで、一般には市販しない教材であった。夏休みが終わってしばらくして、夏休みの宿題が先生から中学生本人に返却され、いよいよ必要無くなったから、その宿題帳はめでたく私に払い下げられることになったのである。

さて実物を手にして改めて見直してみると、「チュー川」に限らず、設問に出題されている中国地名、出題文や地図・図表に含まれる中国地名、全てカタカナのみで漢字無しであった。ここでは是非画像として引用したいところなのであるが、何しろ学校単位で教材としてしか購入出来ない、店頭・学習塾・個人への販売はしない、という教材である。縦令^{たてまえ}学術目的だとは言え、ここに引用して関係者に思わぬご迷惑をおかけすることを恐れて、敢えて画像掲載は差し控えたい。ここでは、この教材に実際に出てくる地名を整理するにとどめよう。

河川名

黄河・長江・チュー川

都市名

シエンヤン・ペキン・テンチン・ウーハン・チョンチン・シャ
ンハイ・コワンチョウ・クンミン・シエンチェン

油田・炭田・鉱山名

ターチン油田・シヨンリー油田・ユイメン油田・フーシユン炭
田・アンシャン・タージェ

ダム名

サンシアダム

しつこいようだが、カタカナのみ。漢字は全く無しである。例外は黄

河・長江のみ。実際に中学校で使用されている教科書では、

ホワンホー(黄河)

チャンチャン(長江)

という表記が増えているのだが、ここでは漢字のみ。別冊の解説では、「黄河」と「長江」は「川」とは書かないとわざわざ注意書きがあるのだが、それを言うなら「珠江」も「川」とは書かないぞとツツコミを入れたくもなる。

では、今現在の中学校では中国地名を漢字無しのカタカナのみで教えているのだろうか。これを採用なさった中学校はこのカタカナ表記について把握なさっていることであろうが、現在の中学校で使用されている教科書について言えば、カタカナがメインであるとは言え、カッコに入れた漢字表記が必ず添えられているのである。教科書と各種教材で地名の扱い方が異なるという状況がもし存在するならば、看過出来ないことだ。別の学生からは、学習塾で現在使用している教材を見せてもらった。これも塾の内部で使われている教材で、市販されていないため、画像引用は差し控えるが、やはり漢字無しのカタカナのみであった。そこで、近所の書店で入手出来る中高生用参考書や問題集を調べて見た。そしたらあるわあるわ、漢字無しのカタカナだけである。何年か前に調べた時はカタカナに漢字が添えてあったものだが、いつのまにかこうなってしまう。図6はその一つである。¹⁵これなら市販のものであるから、学術目的で一部を引用してもかまうまい。いかがだろう、見事にカタカナのみだ。漢字表記は一切無しである。読者諸氏、これは由々しきことだと感じられませんか？いや、今カタカナ化しても何とか行けそうな気がするなら、それは

8 おもな工業地域 かつては鉱産資源の豊かな東北部や、外国との窓口であったシャンハイに工業が集中していた。

その後、沿岸地域の開放がすすみ、工業の中心は、南部の臨海部になった。内陸部は、工業化がおくれている。

- ①東北 アンシャン、シェンヤンを中心に、戦前から発達した中国最大の重工業地域がある。
- ②華北と西部 パオトウの鉄鋼業、ランチョウの石油化学工業。ペキン、テンチンでも各種工業が発達。
- ③華中 ウーハンの鉄鋼、機械工業のほか、シャンハイ、ナンキンやスーチョワン盆地のチョンチンなどの大都市で、各種の工業。
- ④ホンコン 繊維製品や電気機器を中心に、工業化がたいへんすすみ、アジアNIES(⇒p.149)の1つに数えられている。

▼中国の鉱工業



図6

何となくでも漢字の存在を認識しているからなのである。漢字を全く教えず、純粋なカタカナ地名として教えるというのは、その認識の仕方を根本から覆すことになりはしまいか。前稿で述べたように、カタカナ表記を上手に運用出来るなら、それは裏に漢字があるおかげなのである。自分が子供の頃ちゃんと漢字を教えてもらった恩を忘れ、自分は今の子供達から漢字の恩恵を奪う先生方って、いったい……。

この問題についてはまだまだ調べるのがたくさんあって、とても本稿で一度に論じられそうにない。これについても次号で詳しく論ずることとし、一旦筆を擱きたいと思う。

(続)

追記1 本稿執筆に際していろいろ手助けをいただいた本学国際教養学部の大木遙さん、法学部の村上健太君に、この場を借りてお礼申し上げる。

追記2 右に資料1として挙げた西脇健治郎『支那地名正しい讀方と解説』だが、古書店で私が入手したものには、裏返しに手書きによる書き込みがあった。もしや支那地名に関するものではと、この走り書きの解説を試みたのだが、どうも次のように読めるようである。

- 協力一致ガ何ヨリ大事
- 油断大敵事故の原因
- 運ハ天カラ降ッテ来ナイ
- 丁寧親切顧客ニ奉仕セ
- 積ム艱難ハ我ガ身ノ光
- 九鉄出札記(笑顔で乗せて、親切に降ろせ)

結果的には本書の内容とは全く関係無いものであったが、この本の所有者は鉄道関係者であったのかも知れない。とすると、手書きの主が本書を購入したのも、職務上の必要或いは職務から来る興味のためであった

のではと、想像を逞しくしている。これもまた古本の楽しみである。

追記3 東方書店発行『東方』誌の「中国語カタカナ表記」に関する連載の一環として、拙文「社会科地図帳中国地名カタカナ現地音表記とその基準について——漢字制限論の残したものを——」を掲載していただいたこととは注(2)で触れた。

ところで、右の拙文中では幾つか「Littler」上の発言を引用した。その内の一つについて私は、拙著を「感情的」だと批判しておられるものとして言及したのだが、後で伺ったところによるとその方が「感情的」とされたのは拙著のことではなく、私が拙著で採り上げた事象のことであつた、とのことである。「感情的」云々については私の読み違いだったようで、結果的に発言者の方には不快な思いをさせてしまった。この場を借りてお詫び申し上げたい。

注

(1) 「地図帳の怪」——中国地名のカタカナ表記の功罪——、『文化科学研究』14-2 (中京大学文化科学研究所、二〇〇三)

「地図帳の怪(2)」——『万里の長城』はなぜ「ワンリー長城」になつたのか——、『国際教養学部論叢』第2巻第1号 (中京大学国際教養学部、二〇〇九)

「地図帳の怪(3)」——地名表記の手引き書をめぐって——、『文化科学研究』21-1 (中京大学文化科学研究所、二〇〇九)

「地図帳の怪(4)」——「陝西」省は「シャンシー」省か「シェンシー」省か——、『国際教養学部論叢』第2巻第2号 (中京大学国際教養学部、二〇一〇)

(2) 「社会科地図帳のカタカナ中国地名について——『黄河文明』は『ホンホー文明』?」と学会「トンデモ本の世界」所収、アスペクト刊 二〇一一年六月

「社会科地図帳中国地名カタカナ現地音表記とその基準について——漢字制限論の残したものを——」東方書店『東方』誌367号所収、二〇一一年九月

をご参照いただければ幸いです。なお『東方』誌所収のものは、東方書店ウェブサイト (<http://www.toho-shoten.co.jp/>) から無料で公開されている (http://www.toho-shoten.co.jp/export/sites/default/toho/toho367_akegai.pdf)。東方書店の関係者各位に感謝申し上げる次第である。

(3) 文部省「地名の呼び方と書き方『社会科手びき書』昭和三十三年(一九五八)」（大阪教育図書、昭和三十四年発行）。中国地名表記のカタカナ化を関係者に広く指示した最初の文献と言つてよい。拙論(3)で資料a12としたもの。

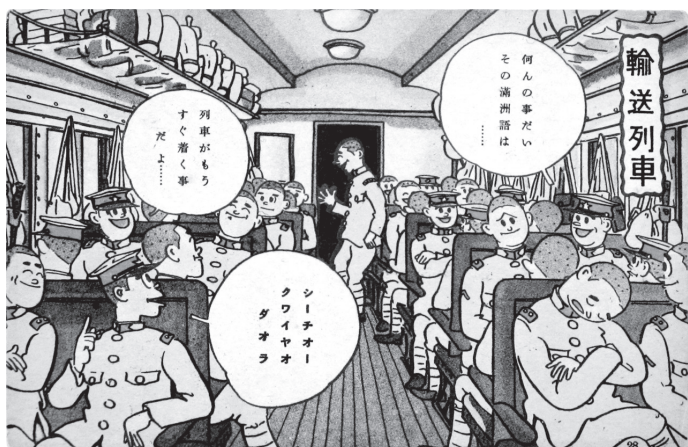
(4) 拙論(3)ではそれぞれ資料b1、b2、b3とした。

(5) 正しくは「地名の呼び方と書き方『社会科手びき書』」。

(6) 拙論(3)に準ずるなら資料b14ということになる。

(7) 本書では、カタカナ表記においても英字表記においても、有気音・無気音を区別しない。

(8) これは全くの余談であるが、当時満州で話されている言葉を指して「満州語」と言う場合、それは本来の満州語ではなく、単に標準漢語を誤つて満州語と呼ぶことが多かったようである。図は戦前の絵葉書である(切手貼付場所に「軍事郵便」とあるのみで、画家や発行所など詳細は不



明)。「シーチオークワイヤオダオラ」「何んの事だいその満州語は……」「列車がもうすぐ着く事だよ……」とあるが、この「シーチオークワイヤオダオラ」は明らかに「汽車快要到了」という漢語であろう。本稿で考察している戦前の人名地名支那語カタカナ読みの動きが、こうしたカタカナ表記、或いは「ニーヤボコベン」の類の所謂「兵隊支那語」と何らかの関係があるのかどうかは、今後の課題である。なお本絵葉書の画像はウエブサイト「みに・ミリーの部屋」満州写真館 (<http://www.geocities.jp/ramopcommand/>) から提供いただいた。感謝申し上げます。

- (9) 国立国会図書館近代デジタルライブラリー (<http://kindai.ndl.go.jp/>) による。全国書誌番号43032794、請求記号396-345。
- (10) 先ほどの資料「西脇『支那地名正しい讀方と解説』はそうなっていないことからすると、これは特に官公庁での書き方だったのかも知れない。
- (11) もちろんこの印が、本書の単なる所蔵者の印である可能性はあるわけだが、書籍本体ならいざ知らず、挟んである挨拶状に自分の所蔵印を捺す人も無かるうと思われる。
- (12) 『日本人名大辞典』(講談社、二〇〇一)、『20世紀日本人名事典』(日外アソシエーツ、二〇〇四) による。
- (13) 二〇一二年二月八日現在。
- (14) 文芸評論家の福嶋亮大氏と京都大学人文科学研究所の池田巧氏の作成された現代中国語カタカナ発音表記のガイドラインで、(α)メディア向け表記ガイドラインと(β)語学教育向け表記ガイドラインとからなる。詳しくは平凡社サイト内の <http://www.heibonsha.co.jp/cn/> を参照。また東方書店『東方』誌364号(二〇一一年)および東方書店ウエブサイト <http://www.toho-shoten.co.jp/> にも関連論文が掲載されている。
- (15) 矢ヶ崎典隆『2ベスト ダンゼンよくわかる くわしい地理 中1くわ2』(文英堂、二〇〇二) による。